

総領事館事件

A Question of Honor

難民が問う日本の「毅然」

北朝鮮の亡命希望者連行は
再び「事なかれ主義」を露呈した

高山秀子（本誌記者）

ハンミは髪にきれいなリボンを結んでもらい、母親の背中にしっかりとくくりつけられていた。2歳を過ぎた彼女は、おんぶして歩くには重い。しかし、決死の覚悟で「自由」を得ようと歩を進める母親にとって、それは身を分けたわが子の命の重さでもあった。

北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）難民の家族5人は、少し開いていた瀋陽の日本総領事館の門から中に飛び込んだ。中国の武装警官が彼らを追いかけて、中にとどまろうとする母親を力づくで引きずり出す。ハンミは母親の背中から転がり落ち、泣きべそをかきながら母親の必死の抵抗を見ていた。

少したって駆けつけた日本人の領事館員は、転がった警官の帽子を緩慢な動作で拾い上げたが、彼らを制止する動作を見せるわけではなかった。結局、5人は総領事館の敷地内まで踏み込んだ中国の武装警官に取り押さえられ、公安当局に引き渡された。

5月8日、中国・瀋陽の日本総領事館で起きた出来事は、写真やビデオ映像で世界中の人々が知るところとなった。

昨年6月、北朝鮮難民のキルス少年とその家族7人が北京の国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）に駆け込み、亡命を果たした事件は記憶に新しい。その後、この家族の他の数人はモンゴルの荒野を越え、ようやく韓国にたどり着いて彼らと再会した。

先週、日本総領事館に助けを求めた5人もこの一家のメンバーで、なんとしてでも「自由」の地にいる家族と合流したかった。とくに若い夫婦とその娘ハンミは昨年、中国の公安当局に捕らえられ、北朝鮮に強制送還されていた。警備をかいくぐって再び国境を越え、中国に逃げてきたこの夫婦が北に送還された場合、そこで彼らを待つのはほぼまちがいなく処刑だ。

裏切られた難民の期待

昨年1月末、私は中国東北部の町の古びたアパートでキルスの一家と会っている。旧正月用のモチやキムチがちゃぶ台に並んではいたが、部屋にはやり場のない絶望感が漂っていた。

彼らの胸にあったのは、息が詰まるような中国内での逃亡生活に終止符を打ちたいという思いだった。疲れきった大人たちが泣きはじめても、幼いハンミはよちよちと歩き回り、私と遊んだり抱っこされたりしていた。

北朝鮮難民の子供として生まれた彼女が、この世に生を受けてから経験したことといえば、隠遁と逃亡の生活だけだった。共同通信が配信したビデオの映像を見ながら、かなうものなら手を差し出して、あの子を不幸な現場から抱えて連れ出したいと思った。

おそらく多くの日本人が同じ思いをいだいたと思う。幼い子供には中国も日本も、まして北朝鮮の政治体制も国境もおよそあずかり知らぬことである。

実は今回の家族5人の突入計画を、私はその数日前に知らされていた。しかし当初の予定では、5人は瀋陽の米国総領事館に助けを求めると決まっていた。

事件の直後、私は目撃者から、数歩であれ5人全員が門内に確実に入ったという報告を受けた。昨年6月に北京のUNHCRまでキルスの家族に同行したジャーナリストの石丸次郎は「米国総領事館は、子連れで入るには警備が厳重すぎた。彼らが日本総領事館に飛び込んだのは、日本の人権団体が難民支援に熱心だったこともあり、日本人は助けてくれるだろうと考えたのだろう」と語る。

確かに日本の市民団体は90年代半ばから、小規模ではありながら、飢餓と独裁政治から逃れてくる北朝鮮難民の保護や支援を根気強く続けてきた。しかし先週水曜日の午後、5人の難民が知ったのは、それまで支援してくれた「日本の助けてくれた人たち」と「日本政府」は似て非なるものであるということだった。

優柔不断な政府の対応

今回の一件は、日本という国の現状を見事にさらけ出した。難民の決死の行動が、日本や日本人のあり方を日本人に再考させるきっかけになるかもしれない。

多くの日本人が、テレビに映し出された難民の命がけの抵抗と、およそ緊張感のない日本人領事館員の姿を目にした。政府の対応も遅く、日中両国政府の警官突入経過の事実認識も異なっていた。

昨今の目に余る政治家の醜聞はもとより、総サラリーマン化し、「事なかれ主義」に徹する官僚。何よりも残念なことは、今回の事件も含め国として、そして国を代表すべき人のなかにも「肝を据え、凛として」行動する姿を目にすることが絶えて久しいことだ。

この1年間にも、外国の笑いものになるような対応の仕方が相次いでいる。昨年5月には、北朝鮮の金正日（キム・ジョンイル）総書記の息子、金正男（キム・ジョンナム）が家族連れで成田空港に現れた。小太りの体をブランド品で固め、ゆったりとした身ぶりで、入国管理局の係官に「ディズニーランドに行きたかった」と答えた。

彼はその以前にも何度か来日しており、東京・赤坂のクラブなどにも出没していたという。日本のある雑誌には、彼の夜の相手をしたという韓国人の元ホステスの手記まで掲載された。

日本側が金正男をそれまで泳がせていたのだとしても、昨年来日した際の政府の対応は珍妙極まりなかった。自国民が、それもいたいけな女子学生までが拉致されているのに、中国からの圧力もあってか、あるいは「主体（チュチェ）思想」ならぬ「日本の事なかれ主義」を貫いたのか、金をあっさり北京に送還してしまったのだ。

中国における北朝鮮難民の問題は、まったく解決していない。中国は彼らを難民として認めないばかりか、こうした事件が起きるたびに中朝国境で大がかりな難民狩りを行い、北に送還する。

彼らが穴蔵の動物のように隠れ住む悲惨な状況から抜け出すには、もはや「駆け込む」以外の選択肢がなくなってきている。国際社会が問題解決に動きださないかぎり、北朝鮮難民の苦難は続く。

5人にとっては、総領事館の門の内と外が生命線だった。途方に暮れる幼いハンミの姿を見て、多くの日本人は、領事館員が毅然とした態度を示してほしかったと歯ざしりしたはずだ。

本当に問われるべきは、難解な条約や外交問題より、人権や人道だろう。わざわざ警官の帽子を拾い上げるよりは、中国の警官を決然と外に出し、あの子を抱き上げてほしかった。

ニューズウィーク日本版

2002年5月22日号 P.28

©2003 Newsweek, Inc. ©2003 Hankyu Communications Co., Ltd. 無断転載・複製を禁じます。